
コナミ君のフロニャルド冒険記

トッポ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コナミ君のフロニヤルド冒険記

【Nコード】

N0807Z

【作者名】

トッポ

【あらすじ】

遊戯王タッグフォースのコナミ君、訳も分からずいつの間にか彼は異世界に！？

果たして彼は元の世界に戻れるのだろうか！？

と言っか戻る気あるのか！？

終わりの始まり(前書き)

すみません。

DOG DAYSをTF6をプレイしながら見てたらポツと思いつか
べた衝動で書いてしまいました。
本当にすみません。

終わりからの〜始まり

ネオダイダロスブリッジ。

サテライトとシティを繋ぐ架け橋、未来へと紡ぐ希望の道標として建てられたこの場所で二人の男が相對している。

一人は二輪車……Dホイールに跨がり、もう一人の男不動遊星は少し寂しそうな面持ちで佇んでいた。

「……やっぱり、皆には会っていかないのか？」

遊星の問い掛けに男はゆっくりと頷く。

別に彼等と別れるのが辛いとか、そんな理由じゃない。

今この場で会えなくとも、いつかまた何処かで笑いながら会えるのを信じているから。

だから、一足早く先に行くことにした。

口元を吊り上げ、笑みを浮かべている友に遊星はやれやれと呆れた様に頭を掻くが、直ぐに男と同じ笑みを浮かべ。

「そうだな、それがお前だったな。誰よりもデュエルを愛する男、

そして誰よりもデュエルを楽しむ男……コナミ」

遊星が男の名を呼ぶと、コナミはDホイールのエンジニアにギアを回す。

辺りに響く駆動音、だがそれも二人の耳には心地よいモノに聞こえる。

「また戻ってこい！　そしてその時は……またデュエルしよう！！」
拳を突き出し、再会を約束する遊星、そしてコナミも遊星の拳に拳で重ねる事によってそれに応える。

そしてアクセルを踏み込み、コナミは風となって走り去っていく。

瞬く間に小さくなっていく友の背中を、遊星は逸らす事なく見つめ続けた。

「……不思議な奴だったな」

最初に見掛けたのはまだシティとサテライトが繋がっていなかった頃。

Dホイルのパーツ探しにラリーと一緒に最寄りのくず鉄置き場に行った時だった。

赤いジャケットに赤い帽子、黄金に輝くデュエルディスクを携えたアイツが、地に落ちているカードを広い集めていた。

喻え凄い能力が無くとも、喻えどんなに弱いカードでも、アイツは嬉しそうに泥だらけになりながらカードを集めていた。

どんなカードでも大切に扱うアイツに、俺は自分でも気付かない内に声を掛けていた。

それからと言うもの、アイツは無口だったが皆とは直ぐに仲良くなった。

最初は警戒していたラリー達も、心を閉ざしていたアキも、ジャックにもクロウにも、龍可や龍亜にも友のように、家族のように接してくれた。

そして俺にも、Z・ONEとの戦いで絶望仕掛けていた時も、父さんと一緒に助けてくれた。

今でも思う、あの時父さんの言葉を運んでくれたのは、アイツだったんじゃないかって……。

結局、アイツが一体何者なのかは聞き出せなかったけど。

「いや、そもそも俺達にはその必要がなかったな」

アイツは俺達の最高の仲間、友達、家族。

喻えアイツが何者であっても、これだけは変わらない。

そう、ブルーノの様に　。

「来たか」

俺達の街、ネオドミノシティの方角からDホイール独特の駆動音が聞こえてくる。

見えてきたのは白と赤と黒、そして二台のスケボー型Dホイール。

さあ、始めよう。

俺達、チーム5D・sの新たな旅立ちに！

ライディングデュエル、アクセラレーション！！

ライディングデュエル、それはスピードの中で進化したデュエル。

数多の決闘者がスピードの中で競い合い、中でもその身に伝説の赤き龍の痣を刻み者達を　人々は。

5D・sと呼んだ。

そして、今青いDホイールを駆り、ネオドミノシティに別れを告げた青年、コナミもWRGPの優勝チーム、5D・sに属していた。

Dホイールに詳しく、且つデュエルに於いて相当に腕も立ち、5D・sの支えともなっていた彼だが。

残念な事に物事に完璧がないと同じく、彼には幾つもの欠点があった。

まず一つ目は彼は相当の寝坊助であり、誰かが起こしに来ないといつまでも寝続ける事もあり、5D・sの面々このせいで多大な労力を費やした経験がある。

更に彼は……多少の天然も入っており。

「……………おお？」

突然現れた空間の歪みに全く動じた様子もなく、そのまま歪みの中へと突っ込み。

彼はこの世界から姿を消した。

ねえ、知ってる？

今私達が使っているデュエルのカードって、遙かの昔に宇宙から来たって言う話。

デュエルモンスターズの生みの親、ペガサスも正確な記述は残していないけど、ここ最近ちょっととした大発見があるんだよね。

初代にして歴代最強の決闘王者、武藤遊戯。

旅の放浪者でカードの精霊と対話できる少年、遊戯十代。

そしてネオドミノシティの守護者、不動遊星。

いずれも異なつた時代の人間だけど、そこにはある噂があつたんだ。

それは赤い帽子を被つた少年が、その三人とそれに連なる人達を人知れず助けていたんだって。

どれも皆、世界の危機を救ってきた人達そしてそこに大なり小なり介入して彼等を導いている。

偶然にしては出来すぎてるよね？

ここである一説が唱えられたんだけど、頭の固い学者達はこぞって

これを否定。

ま、それも当然だよな。

そんなの一般大衆の妄言でしかないもの。

でもある日、私達は見付かった……否、見付けてしまった。

とある大地の奥底からある記述を記した一枚の石盤。

そこに描かれていたのはたった一言。

“ 其ノ者、星ノ加護ヲ受ケ、世界ヲ見守ラン ”

“ 其ノ者ノ名ハ ”

きつと、彼と過ごしてきた彼等ならきつと感付いただろうね。

彼はこの星と共に生きて、そして未来を繋ぐ子供達を見守り、時には助けるのだろう。

それはきつと、彼が何処に行っても変わらない。

そう、彼こそは。

人類最古の決闘者なのだから。

終わりからの〜始まり(後書き)

うん、まずは一言。

DOG DAYS書いてねええ!?

戦場iコロナミ(前書き)

えー、相変わらずの駄文です。

戦場iノコナミ

「……ん、ん？」

何だか息苦しい。

普段寝相は比較的マシなコナミだが、自身の首に掛かる異様な圧力に不快を感じ、否応なしに目を覚ます。

目を開けると上から草が生えていた。

否、自分が逆さまになっていたのだ。

何で自分が逆さまになっているのか、一先ずコナミは寝惚け眼を擦りながら起き上がる。

……寄り掛かっていた木々に頭を下げ、「どうもすいません」と他人行儀にしている所を見るとどうやらまだ寝惚けている様子。

ポリポリとトレードマークの帽子越しに頭を搔き、辺りを見渡すと……。

「……森だな」

そう、森であった。

小鳥が囁り、木々の葉が風で揺らぎ、空からは日の光が葉の網から零れ、薄暗い森を照らしている。

ぶっっちゃけ寝たい。

さらさらと葉の揺れる音がコナミを睡魔へ誘っていく。

しかしそう言うわけにはいかない。

そもそも自分は何で森の中で寝ているのか、原因は意識を失う前に見たあの空間の歪みである事は確かなのだが……如何せん情報が少ない。

コナミは近くで横倒しになっている黒に近い深い青色のDホイール、“Z”を起こし荷物から一台のノートパソコンを取り出し、Zに接続している。

どうやらこのノートパソコン同様、Dホイール、モーメント共々異常は見受けられない様だ。

その事に安堵したのか、コナミは大きな欠伸をし、また眠たそうに瞼を擦る。

パソコンを仕舞い、Dホイールの起動を試みる。

オートバイ独特の駆動音が森中に響き渡り、その音に驚いた小鳥達

が一斉に飛び立っていく。

やっちまったなと申し訳なさそうに苦笑いを浮かべ、頬を掻く。

一先ず何処にも異常がない事を改めて確認し、コナミはDホイールのエンジンを止め、手押しで転がしていく。

そしてその際、コナミはDホイールに取り付けていた黄金のデュエルディスクを取り出して左腕に装着し。

“いざという時”の為にポケットから彼がこれまで共にしてきた“仲間達”を取り出し、デュエルディスクへ挿入。

カシャカシャと音を立て、シャッフルの完了を合図にコナミは再び歩き出す。

「……腹、減ったな」

何とも頼りない言葉を呟きながら、コナミは見知らぬ大地を歩き出す。

今、私達ビスコッティ共和国はガレット獅子団領の侵攻で嘗てない

危機に陥っています。

度重なる戦の敗北、兵の皆さんは精神的に疲弊し、ビスコッティは国全体が落ち込みムードに包まれていました。

元老院も、親衛隊長も側近の皆は人が変わった様に戦を仕掛けてくるレオ様に戸惑うばかり。

レオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ閣下。

ガレット獅子団領国の国王にて私とは姉妹同然の間柄だった幼馴染み。

少し前までは一緒にお花畑で遊んだり、国政で相談したりと、立場は互いに変わってもレオ様はなんら変わらず接してくれました。

なのに……どうしてあんな、私を“犬姫”と呼ぶようになるなんて……私、レオ様に何か嫌われる様な事したのでしょうか？

とは言え、この戦に負ければレオ様にその事をお聞きする機会すら無くなりそうなので、何としても勝たねばなりません。

しかし、ダルキアン卿やユキカゼさんがいない今、戦力差で私達の敗北は必至。

だから私は切り札を取ることにしました。

私の為に頑張ってくれている家臣の皆さんには本当に申し訳なく思っています。

特にエクレーにはどんなに謝罪しても足りません。

人一倍の頑張り屋さんで、兵の調練に自身の鍛練、次こそは負けな
いと決意した矢先に決まった今回の一計。

本当に、本当に……ごめんなさい。

「姫様、どうしたでありますか？」

「あ、リコ……ううん、何でもありません」

隣で心配の面持ちで見つめてくるのは学友のリコッタ＝エルマール。

「何だか顔色悪いですが、大丈夫でありますか？」

やはり、私はまだまだ未熟な国王、あまり心配させまいと気を配っ
てもどうしても悟られてしまう。

「大丈夫ですよリコ、私なら平気です」

「はわ〜、姫様の撫で撫で〜」

リコの頭に手を乗せ、私の数少ない特技、撫で撫でに彼女は幸せそ
うに頬を緩める。

そう、今回ばかりは負ける訳にはいかない。

ビスコッティの国民の為にも、そして私を信じて支えてくれている
家臣達、皆の為にも。

「勇者様、どうか……」

私は、ただ異世界からの召喚者、シンクⅡイズミ様に祈りを捧げる事しか出来なかった。

「とりやあああつ！」

「よっ」

「でやああああつ！」

「ほっ」

「だりやあああつ！」

「あらよっ」と

次々と襲い掛かる猫耳の男達、それを曲芸とも呼べる軽業で難なく避け、戦規定に基づいた急所へタッチする少年シンクⅡイズミ。

手の甲に浮かんだ紋章で後頭部や背中に触れると、その箇所にも同じ紋章が浮かび、彼等を獣玉の猫玉に変化させる。

ノックアウト判定（KO）されて猫玉となった彼等は一定時間無力化される。

そしてシンクはその合間、更に五人、六人とKOしていき瞬く間に猫玉の山を築き上げていく。

『は、速いいいっ!! 何て速さだ! この勇者は赤くもないのにスピードは通常の3倍あるのかああっ!!?』

「何で異世界なのにそんなの知ってるの!?!」

興奮気味の実況のアナウンスに思わず突っ込みを入れるシンク。

そうしている間にもまた一人、猫玉へと変化させていく。

「さて、騎士団長さんの話によれば、確かこの辺りに……」

様々な難所……シンクにとってはいつものアスレチック、それをも乗り越え、遂に彼は本来探していた人物と合流できた。

するとその人物は大勢で押し寄せてくる敵を前に構え。

「烈空、十文字いいっ!!」

気合いの雄叫びと共に二刀の短剣から閃光を放ち、一瞬にしてあれだけの数の敵を猫玉に変えてしまう。

しかし。

「せいやあああっ!!」

「っ!!」

討ち漏らした敵が一人、少女に向かって突貫してくる。

不意を突かれ、突っ込んでくる敵を前に一瞬反応が遅れるが。

「勇者キーク！！」

シンの必殺蹴りが敵を打ち倒し、猫玉へと姿を変化させたのであった。

私は、目の前のこの男が嫌いだ。

へらへらと笑い、戦における緊張感を欠片程持ち合わせていないこの男は……不本意だが勇者として呼ばれた者。

「エクレール！今のさっきのビームって、やっぱりアレ!?!」

年相応の笑顔を浮かべ私に聞いてくるこの勇者（仮）はシンク＝イズミだと言う。

………というかビームってなに？

「………紋章砲の事か？」

紋章砲の事すら知らないとは………異世界と言うのは私達の知る常識とはここまで違うものなのか。

とは言え、紋章砲を教えるのは姫様からのご命令であるなら、従う他あるまい。

いいか、姫様の為に仕方なくだからな！

別に姫様が私の紋章砲が上手と誉めてくれたとか、そんなんじゃないんだからな！！

「オオオオオオオつ！！！」

「うわ、また来た！」

どうやら敵の第二陣が攻めてきた様だ。

調度良い、あれを的に教えてやるか。

これで無駄に気力を消耗せずに済むからな。

「まずは自分の紋章を発動させる」

「紋章発動！ レベル1！！」

「全身の力と気合いを込めて、紋章を強化！！」

「ウィッス！！」

「レベル2」

「レベル3！！」

「フロニヤの力を気力に変えて、自分の武器から打ち放つ！！」

「それが……紋章砲！！」

土煙を巻き上げ、数の力で押し寄せてくるガレットの軍勢。

だが、相手が悪かったな、貴様等雑兵では私を私達を止める事など。

「出来はしない!！」

気合いと共に打ち出された二つの紋章砲は互いに混ざり合い、より強力なモノとなって敵軍勢を呑み込んでいく。

……というかたったあれだけで紋章砲を容易く打ち出したコイツ、確かシンクゥイズミだったか？

私が何年も掛けて会得した紋章砲を容易く扱うとは……やっぱりコイツ、嫌いだ。

「紋章砲は便利だが、防具や甲冑を許された団長や騎士には防がれる事が多い、それに何より……」

「射つと結構疲れるね」

そうは見えないが……嫌味か？

とは言えこれでコイツに伝える事は終わった、あとは……

「っ!？」

一筋の翡翠の閃光が敵を倒し気が抜けていたシンクに襲い掛かる。

咄嗟の事で反応出来なかったシンクの代わりに、エクレールが前に出て二刀の短剣で以てこれを防ぐ。

しかし閃光に込められた威力は凄まじく、受け止め切れないと判断したエクレールは短剣の刃を逸らし、閃光に弾かれながらその軌道を変えていく。

軌道を変えられた閃光は二人の上空斜め上の浮遊石に激突し、その正体を露にする。

閃光の正体は唯の矢、しかも戦規定に基づいて使用されるペイント矢。

なにもあんな殺人的な威力を持たせるのは、並大抵の猛者では不可能。

否、エクレールはその人物に心当たりがあった。

一人は大陸最強の剣士、ブリオツシュ「ダルキアン卿」。

そしてもう一人は……。

「ほんのチビツとだけ期待はしていたが、所詮は犬姫の手下か」

「レオンミシエリ姫!!」

「姫様? ……てことは、あっちの?」

もう一人はガレット獅子団領国王。

「チツチツ、姫などと気安う呼んで貰っては困るのう、我が名はレオンミシエリ」ガレット「デ」ロワ、ガレット獅子団領国の王にして百獣王の騎士」

そう、彼女の言う通り。

彼女は獅子の国を束ね、そして頂点に君臨する者。

「閣下と呼ばんか、この無礼者がっ!!」

百獣の王、レオン閣下なのだ。

黒い鳥獣、セルクルのドーマに跨がりその威圧感は一層に倍。

彼女の燃えたぎる闘気に気圧される二人。

「ハッハッハッ、ま、それはさておきワシは先に進ませて貰おう。
ハイヨーッ!」

しかしレオンミシエリ閣下は二人を無視、高々と笑いながら愛騎ドーマと共にその場を後にした。

二人も直ぐに後を追うと立ち上がるうとするが。

「ええい! 邪魔だ、どけ、勇者!」

「いや、そつちこそ!」

もみくちやになる二人、我先にと立ち上がるうとするやる気が逆に

互いの足を引っ張る嵌めになり。

モニユ

「っ！？」

「……へ？」

モミ、モミ

「……女の子？」

「……！！！」

勇者は一人の乙女の鉄拳により、空を舞う事になった。

え？ 彼の身に何が起きたって？

そうですね、一言で言えば。

勇者爆発しろ。

「それは理不尽でしょうっ……！！！」

それからというもの、レオ閣下の侵攻は圧倒的と言わざるを得ない勢いだった。

足場の悪い難所にもドーマによって難なく攻略し、迎撃射撃の矢の雨も、槍振りのみで打ち落とし、更にはその槍の投擲により、弓兵全てを櫓ごと撃破してしまう。

圧倒的な武力による圧倒的な侵略、それはまさに暴君と呼ぶに相応しい振る舞い。

そして最終防衛線の一步前、スベスベ壁に囲まれた吊り橋エリア。

「駆け抜けるぞ、ドーマ！」

「グアッ！！」

「させるかあああっ！！！！」

愛騎ドーマと共に吊り橋エリアを抜けようと飛翔する閣下、しかしそれを若き親衛隊長と勇者が阻む。

ドーマの脚力に追い付く二人は充分化け物と呼ぶに相応しいだろう。

吊り橋の反った壁を瞬く間に駆け登り、跳躍した二人は遂に追い付き、そのまま手にした獲物でレオ閣下に振り下ろす。

しかし二人の狙いも閣下は読んでいた。

「フツ」

不敵な笑みと共にドーマを足場に跳躍、互いの武器をぶつけるだけに終わった二人はバランスを崩し。

「せえいつー！」

「うわああっ！」

「きゃああっ！ー！」

閣下の戦斧、紋章砲の一撃に地面に叩き付けられてしまう。

岸に着地したドーマは胸元に備えられた盾をくわえ、主であるレオ閣下に投げ渡す。

それを受け取り華麗に着地を成功させ、その長い銀髪を靡かせながら倒れ伏す二人に歩み寄っていく。

「勇者、お前は何なんだ！？ 戦いの邪魔をしにきたのか！？」

「そ、そっちこそ僕の邪魔を……」

激しさを増すかと思つた二人の言い合いは、意外にも呆気なく沈静化。

それはそうだろう、すぐ後ろでトンでもない気力を練つた閣下が自分達を捉えていたのだから。

「……あ」「」

振り上げた斧、全身に満ちる闘気。

閣下の背後に見えるガレットの紋章がより彼女の威圧感が増していく様に感じる。

あれはヤバい。

二人がそう直感した瞬間。

「どりゃあああつ!!」

手にした戦斧が振り下ろされ。

「獅子王炎陣！」

たちどころに火柱が立ち上り、敵味方問わず炎の波が全てを呑み込み。

更には空から炎を纏った礫が降り注ぎ、逃げ惑う両国民を食い潰していく。

「紋章術って、こんな事まで!？」

「レオ姫のは桁が違う、早く逃げ……!？」

「エクレール!？」

こんなもの相手にするだけ無駄、閣下の奥義に呑み込まれる前に離脱を試みるエクレールだが。

「く、足が!」

右足に感じた鈍痛に身動きが取れないでいた。

「エクレール、まさか……足が!?!」

そしてシンクも気付いた。

彼女の足は先程自分達が閣下によって地面に叩き付けられた際に負った怪我だと。

「勇者、貴様は先に逃げろ!」

「で、でも!」

「教えてやった紋章術を使って上に逃げろ! そうすればお前だけでも逃げられる!」

「そんな事!?!」

「貴様は姫様に召喚された勇者だろう! 姫様の期待に応えずここで私と共にやられる気か!?!」

期待に応えられない。

その一言がシンクの胸に鋭い刃となって突き刺さる。

自分の為に自分の我が儘に応えられなくて、彼女のヒーローになれなくて……それが悲しくて、それがとても悔しくて。

だけど。

「だからって、怪我した女の子を見捨てたら、僕は勇者以前に男で

すらない!?!」

「のわっ!?!?」

ここで逃げてしまったら、きっと彼はヒーローになる資格すら失ってしまふ。

だから、逃げる時は一緒に。

エクレールを抱え、シンクは直ぐに逃げようと試みるが。

「大・爆・破!!」

既に遅かった。

集約された炎の渦が連鎖爆発を引き起こし、吊り橋エリアの全てを呑み込む。

(姫様……ごめん)

ここまでか、シンクが心の中で自分に期待を寄せていたお姫様に謝罪の言葉を口にした時。

「え?」

その者は現れた。

この世界にはない筈の、それでいて見たこともないバイクと赤い帽子を被った青年が。

自分達の前に現れた。

黒い煙が吊り橋エリアに充満している。

獅子王の必殺技、“獅子王炎陣大爆破”は吊り橋エリアだけに留まらず、その衝撃は戦場全てを震わせていた。

敵味方区別なく全て獣玉と化し、その威力の凄まじさは周囲の惨状が現している。

死人がないのは大地の加護があつてこそだろう。

『だ、大爆破あああつ！！ 出ましたレオンミシエリ閣下の獅子王炎陣大爆破！！ 敵味方問わずに攻撃してしまうのが難点ですが、この一撃を受けた者は立つてはられないという大技！！ これで今回の戦は決まったかあああつ！？』

「フランボワーズ、確認せい！ 勇者と垂れ耳はちゃんと死んだか？」

『あ、はい！』

レオ閣下に言われ、現場状況を確認する実況のフランボワーズ。

とは言つても、レオ閣下には確信があつた。

爆発に巻き込まれた際、勇者達二人は成す術なく呑み込まれていく

様を見ていたのだから。

恐らくは勇者は黒焦げ、垂れ耳と呼ばれるエクレールは丸裸になっているのだろう。

少しやり過ぎたかと呟くが……。

『れ、レオンミシエリ閣下………』

「どうした？　しっかり報告せんか！」

震える実況の声、一体どうしたのかと問い詰めると。

『か、彼等は無事です。それ処か傷一つついてません！！』

「なん……じゃと？」

そんなバカな。

閣下は実況の言葉が信じられず、目の前の立ち上る煙に振り向く。

獅子王炎陣大爆破は広範囲殲滅型の紋章術。

加えて込めたのは自身の渾身の気力、防ぐ手だてはない。

だが。

晴れていく煙から露になった光景にレオンミシエリは初めて動揺を見せた。

「……誰じゃ、貴様は！」

見たこともない乗り物に跨がり、障壁らしき防護術に守られている男。

そしてその後ろには自分と同じ驚愕に目を見開いた勇者シンクと親衛隊長エクレールの姿があった。

「^{トラッシュ}畏発動、和睦の使者」

“和睦の使者”

相手からの受ける戦闘ダメージは全て0となり、このターン自分の場のモンスターは破壊されないという防御特化の畏カード。

しかしそれを知る由もない彼女には目の前の男が得たいの知れない怪物に見えた。

一体どこから現れたのか、戦場にいる誰もが戦闘行動を中断し、突然現れた男に釘付けとなっている。

そしてそれは城から見守るリコッタやビスコッティの王女、ミルヒ
オーレ^{フィリアン}、F^{フィリアン}ビスコッティも例外ではなかった。

「答えよ！ 貴様は何者じゃっ!?!」

戦斧を向け、雄叫びと共に問い詰めるレオンの言葉にも動じず、男ことコナミは彼女の問いに無視し。

それ処か彼女に指差し。

「おい」

コナミは大胆不敵にも

「デュエルしろよ」

一国の国王に宣戦布告を叩き付けた。

戦場iノコナミ(後書き)

漸く絡ませられた！

前回第一話でコナミ君を人類最古の決闘者にしたのはTFをプレイした作者なりの推測ですので……あまり突っ込まないで(泣)

あ、感想お待ちしております！

王VS帽子男(前書き)

シンク& amp・エクレ「なーっかな、なーっかな？ 今週はコレ！」

“ジャンク・ウォリアー”

シンク「うはー！ かつこいい！」

エクレ「自分の場のモンスターから攻撃力を上乗せする効果を持っているという、地味に凄いカードだな」

シンク「じゃあ、早速いつてみようか！」

エクレ(というか、何故私がこんな事を……)

深く考えたら負けである

王VS帽子男

誰もが確信していた。

ガレット獅子団領国、国王のレオンミシエリ「ガレット」デ「ロワ、彼女の放った獅子王炎陣大爆破の爆発は逃げ損ねた勇者シンクと親衛隊長のエクレールを呑み込み、二人を葬ったのだと。

今頃はそこら中に散らばる獣玉同様、黒焦げになり醜態を露にし、ガレットの獅子王が雄叫びを上げ勝鬨を挙げるのだと。

誰もが自分達の勝利を、そして敗北を確信した。

しかし、それはたった一人の乱入者によって覆られた。

その者は見たこともない乗り物に跨がり、左腕には奇妙な機械を取り付け、赤いジャケットと赤い帽子を身に付け……異世界から勇者として召喚されたシンクただ一人を除き、この世界には見慣れない格好で佇んでいる。

戦場は静まり返り、皆何が起こったのだと混乱する頭を整理していた。

そんな最中。

「おい、デュエルしろよ」

“デュエル”

その言葉にどんな意味が含まれているのかは知らないが……否、恐らく彼はこう言いたいのだろう。

それは……。

『い、一騎討ちだあああつ！！ 突然現れた謎の乱入者がレオン
ミシエリ閣下に一騎討ちの申し入れを叩き込んだあああつ！！』

実況のフランボワーズの叫びが静寂した戦場に起爆剤をブチ込む。

『え、てかあの人誰！？ 見た感じビスコッティの勇者と外見は似
ていますが……まさかビスコッティは勇者を二人も召喚したのかあ
つ！？』

「おい勇者！ 誰なんだアイツは！？ お前の知り合いか！？」

「し、知らないよ！ だって召喚された時は僕一人しかいなかった
んだし、エクレールこそ知らないの！？」

「あんな常識はずれな輩など私の知り合いにはいない！！」

突然現れた青年、コナミに混乱の極みに陥る二人。

後ろで騒ぎ立てる二人にコナミは特に反応せず、指差したレオンか
ら視線を外さず。

対するレオンもコナミからの視線から逸らさず、鋭い眼光で射抜い
ている。

「おいお前、一体何者だ！？ そして何処から現れた！？」

親衛隊長エクレールの激昂に満ちた問い、するとコナミは二人の方に振り向き。

「俺は、コナミ」

「へ？」

「これ、頼む」

「え、ちよっ!？」

自身の名を告げると共にDホイールから降り、レオンの下へ歩み寄っていく。

名前だけ告げられ、またもや呆然となるエクレール。

我に返る頃には既にコナミはレオン閣下の目の前にまで迫っていた。

「貴様、散々ワシの言葉を無視するだけではなくよもや一騎討ちを挑んでくるとはな……その威勢と度胸だけは褒めてやろう」

怒気の孕んだ低い声、その声色からして彼女の怒りは正に頂点ギリギリにまで迫っている。

当然だろう、彼女は一国の代表者でガレット獅子団の百獣の王。

突然現れた男は奇妙な術で自身の技を簡単に防ぎ、その上勇者と親衛隊長を救い、更には此方からの問い掛けに悉く無視しているのだ。

最初は警戒心全開にしていたレオン閣下だったが、何度も無視し、トドメに一騎討ちを申し込んできた目の前の男に怒りのパラメーターが振り切ろうとしていた。

そんな彼女に対しコナミは……。

「……………」

やはり無言であった。

「よおし、そんなに死に急ぎたいのなら今ここで引導を渡してやるう！ その左腕に付いた珍妙な武具が貴様の武器だな!？」

盾を投げ捨て戦斧に気力を込めるレオン閣下。

刃には彼女の気力である緑色の気が付着し、その威力の底上げをしている。

殺る気満々の彼女だが……。

(……………あれ？　なんか怒ってる?)

一方コナミは彼女が怒っているレオン閣下に唯々不思議に首を傾けていた。

時は数分前、森を歩いていると不意に喧騒が聞こえ、コナミは人がい

るのだと思い嬉しくなり、Dホイールに跨がって喧騒の方へ進んでいく。

喧騒が大きくなっていくにつれ自分を囲んでいた木々は減っていき、遂には森を抜け出す事ができた。

しかし、目の前の光景にコナミは言葉を失う。

剣を振り、盾で防ぐ男達。

槍で突き、矢を放ち、ここまで聞けばそれは正に戦国の戦場に思えてるだろう。

しかし、コナミが驚いたのはそこじゃない、いや、驚いてはいるのだろうがそれ以上に驚愕する光景があった。

「……猫耳だ」

よくよくみると戦場と思われる場所にいる誰もが動物の耳と尻尾を生やしていたのだ。

何かの仮装なのかと思ったがピコピコと耳は動き、フリフリと尻尾が揺れている。

しかもやられた兵士はそのまま倒れるのではなく、煙と共に姿を変え、珍妙な生物に変化していくのだ。

それを見たコナミは

「なんだ夢か」

未だ自分は夢の中に入るものだと結論付けた。

そうすれば回りの空に浮いている巨大な……いや、小さな島にも説明が見つく。

こんな光景、精霊界位でしか見たことがない。

因みにコナミは目の前の現実（事実）を受け入れていない訳ではない。

コナミは自他共に認める寝坊助であるが故、自分が夢を見ているが分かる。

龍可とカードの世界、精霊界に行った事が切っ掛けに、精霊界で寝ていた事がしばしばあった。

レグルスのお腹の上で寝たり、エンシエントフェアリードラゴン（略してEFDラゴン）の背中寝たり、兎に角そう言うのが時折あった為、今回もそれに似たようなものだろうとコナミは思った。

「マズイな、牛尾に怒られる」

居眠り運転はご法度、見付かれれば最後Dホイラーの資格は剥奪され、10年以上の牢屋行きという非常に厳しい罰則が待っている。

何とかして起きなくては、コナミはブンブンと頭を振り、覚醒を促す。

「獅子王、炎陣!」

「ん？」

ふと戦場から一際大きな声が聞こえ、そちらを見てみると。

銀色で長い髪の少女が何やら翡翠色の風を纏わせ、戦斧を掲げている。

そして次の瞬間、少女は戦斧を振り下ろすとアチコチに火柱が立ち上り火礫が降り注ぐ。

呑み込まれた兵士達は次々に猫の……玉？になり、周辺一帯が火の海になる。

圧倒的な光景にコナミも「おおー」と驚きの声を上げる。

そんな時だった。

他と違った少年が足を挫いたのか、動けないでいる少女を庇っているのを視界に捉えたのは……。

その様子を見て、コナミは二人をあの兄妹と重なって見えた。

絶望に屈せず、希望を捨てず、そして最後まで諦めず遂には六人目のシグナーへと進化した少年と。

その兄を信じ、仲間を信じ、恐怖に抗い続けた心優しき少女に。

気付けば、コナミは駆けていた。

目の前の障害物をその絶妙なコントロールで難なく捌き、二人の下

へい駆けてく。

これが夢だろうが何だろうが、最早コナミにはどうでもいい事になっていた。

そしてコナミは二人の前に駆け付け、畏カードを発動させたのだ。

これがコナミが現在に至るまでの大まかな事情である。

夢かと思っていた割には防いだ炎の渦には熱が籠っていた。

しかも目の前の少女は怒り心頭のご様子、リアルな顔付きに流石のコナミも戸惑い。

(あれ？　もしかして……夢じゃない？)

漸く自身に起きた出来事を把握し始めた。

その時だった。

「ぶるあああっ……！」

「っ……」

頭上から襲い掛かる鉄球、コナミは咄嗟の出来事に驚愕するも後ろに下がり鉄球を避ける。

鎖に繋がれた鉄球は地面に深々とめり込み、その威力を物語っている。

「閣下あ、ごお無事でしたかあ!!」

少女とコナミの間に降ってきた大男、手にはその巨体に見合った大きな斧が握られ柄には鉄球の鎖と繋がっている。

「貴い様あ、何処から湧いて出て来たかは知らんがあ、閣下に仇なそおとしてもそおはあさせんぞお」

フン、と一息で地中に埋まる鉄球を易々と引き抜く大男。

見た目通りの怪力に加え大男の威圧感により大きさは更に大きく見える。

力勝負では全くコナミには勝ち目が無い構図、一触即発な空気以降ろで控えている二人もゴクリと息を呑む。

しかし。

「下がっておれ、ゴドウィン」

「閣下!?!」

「こやつはワシに一騎討ちを挑んできた。その勝負を受けないとあつてはガレット獅子団、ついではこのレオンミシエリの名折れよ」

「し、しかし閣下あ、この者は妙な術を使います故、お一人では……」
「ゴドウィン、貴様はワシがこの帽子に負けると、そう言いたいのか？」

「む、むむう……申し訳ありませんでした」

家臣をも黙らせる王者の一喝、コイツは自分の獲物だと目で訴えてくる。

こうなつては自分の言葉など聞き入って貰える事はないだろう。

ガレット獅子団の騎士団の将の中では比較的新参者であるゴドウィンは、己の無力に嘆きながらも後ろに下がる。

(……ゴドウィンか)

渋々と後方に下がる大男、その男の名前にコナミは嘗て自分達の街の守護者だった人物を思い出す。

そして、闘いの舞台は整った。

「さて、邪魔が入ったが、これで存分に闘えるというもの」
「……………」

戦斧を肩に掛け、鋭い眼光でコナミを射抜く彼女の目はまさしく肉食獣そのもの。

対するコナミは自身の危機的状況に関わらず、相変わらず無表情というある意味余裕の態度。

それが気に入らなかつたのか、レオン閣下は戦斧を握り締め。

「まずはその態度、改めさせてやるっ!!」

コナミに向かって横に薙いだ。

ブオンと風切り音が鳴り響き、必殺の一撃がコナミを襲う。

しかしコナミはこれを後ろに跳躍する事でこれを回避、意外にも身体能力の高いコナミに一同騒然となる。

「うわ、凄いジャンプ力!」

「アイツ、騎士か何かあのか?」

正直、コナミは戦闘能力云々はレオンミシエリ閣下やエクレール、シンクに比べ見劣りする部分がある。

だが、これでも彼は決闘者^{デュエリスト}。

幾度の危機をデュエルで、或いは己の肉体で乗り越えてきた男である。

磨き上げた彼の身体能力は遊星やジャック、クロウにだって引けは取らない。

故に、ただの攻撃を逃げ回るだけなら何ら問題はないのだ。

それに、コナミは一人じゃない。

その左腕に取り付けられたデュエルディスクにはこれまでコナミと

共に戦ってきた仲間達がいるのだから。

「ほう、どうやら逃げるには多少自信があるようじゃな。……だが」
レオン閣下は再び戦斧を両手で握り締め、次の攻撃の構えを取る。

「次は、外さんぞ」

捕食者の目でコナミを見る、すると彼の左手にはいつの間にか五枚のカードがあった。

恐らくは後ろに下がった時に引いていたのだろう。

一体何をするつもりだ？ レオンはコナミの拳動を注意深く観察し、出方を伺つと。

「俺の、ターン」

左腕に取り付けられた奇妙なガントレットから一枚のカードを引く。

（遂に仕掛けるか？ コヤツは先程ワシの一撃を防いだ男、要注意せねば）

「俺は手札から、ソニック・ウォリアーを守備表示で召喚」

「っ！？」

コナミがディスクに一枚のカードを置くと、二人の間に一人の戦士が現れる。

全身を緑色の鎧に包まれた戦士、身を固くさせ防御の姿勢に入っている。

「カードを二枚伏せ、ターンエンド」

更にコナミの前に二枚の巨大なカードが伏せられ、音と共に消えていく。

その一部始終を眺めていた誰もが、またもや言葉を失った。

カードをあの手腕に付けられたガントレットの上に置いたらいきなり戦士が現れたのだ。

コナミにとっては日常茶飯事の光景であっても、フロニヤルドの人々やシンクにとっては驚愕の出来事。

「貴様、一体何者じゃ？」

「ただの通りすがりの決闘者、別に覚えておく必要はない」

レオン閣下の問い掛けに素っ気なく応えるコナミ、そう、彼女もまたコナミの行動に驚き、また危機を感じていた。

「成る程、貴様の手に握られているカード、それらが貴様の力なのだな」

「半分正解、正しくは“俺達”だ」

「は、成る程成る程、つまり貴様は自分の部下を動かして戦う指揮官か」

「部下じゃない、仲間だ」

部下という言い方に難色を示すコナミ、始めて無表情以外の色を見せるコナミにレオン閣下は不敵に微笑み。

「じゃが、その様な雑兵に恐れるワシではないわぁっ!！」

烈迫の気合いと共に、彼女の戦斧は緑色の戦士に振り下ろす。

真つ二つに斬られたソニック・ウォリアーは硝子細工の様に砕け散り、四散していく。

「なんじゃ、随分脆いな？ 大層な外見の割に随分肩透かしじゃのう」

「さあ、これで終いじゃっ!！」

がら空きになり無防備となったコナミ、振り上げられた戦斧が勢いを付けて振り下ろされる。

しかし。

「畏発動、くず鉄のかかし!！」

「何っ!？」

鉄屑を合わせて即興で造り上げられた鉄製のかかしが、レオン閣下の一撃を防いだ。

「ば、バカな!？ こんなかかし風情にワシの一撃が!？」

信じられないモノを見る目でかかしを凝視する。

当然だ。

どんな猛者だろうがどんな盾だろうが、一撃で粉碎する自分の一撃をたかが鉄屑に防がれたのだ。

彼女が混乱するのも無理はない、このままでは埒が開かないと悟った閣下は後ろに下がり様子を見る。

するとかかしは閣下が下がると共にカードに吸い寄せられ、消えていく。

「ち、まさか我が一撃をたかが案山子^{かかし}が受け止めるとは……」
「……………」

相変わらずの無表情のコナミ、しかし対するレオン閣下は嬉しそうに、楽しそうに口元を歪める。

「じゃが、次はこうはいかんぞ、貴様の仕掛けた小細工など噛み砕いてくれる！」

「俺のターン！」

対するコナミの内心は少しばかり焦っていた。

見たこともない戦い、聞いたことのない技、そして何より今までとは違うデュエルに戸惑っていた。

否、もはやこれはデュエルとは呼べない。

どういう訳か実体化しているモンスターとそれを軽々と粉碎する少女。

実体化したモンスターは軍の攻撃すら通用しない究極の兵器。

尋常ならざる力を持った者が何度も攻撃してくるのだ。

今までのルールに従ったデュエルではなく、相手とリアルタイムで戦うという通常ではあり得ない戦い。

全く違う次元となったデュエル、しかしコナミは。

「……フ」

楽しそうに笑っていた。

「俺は手札から魔法カード、デュアルサモン二重召喚を発動、これによりこのターン、俺は二回までモンスターを通常召喚出来る」

「……ほう？」

コナミの言葉に何を思ったのか、不敵に余裕の笑みを浮かべる閣下。

「俺は手札からロードランナー、スピード・ウォリアーを守備表示で召喚！」

『クア、クア！』

『ヌン、ハアツ！』

コナミの下に現れた鳥獣と戦士、しかも鳥獣の方は何処と無くセルクルに似ている。

「……ターン、エンド」

二体のモンスターを出し、次に彼女がどう出るか、コナミが閣下の動きに注意を払っていると。

「ククク……ならば、ワシのターン！」

「っ!？」

突然自分と同じ言葉を言い出すレオン閣下にコナミは初めて動揺の仕草をみせる。

そしてそれが彼女の頭に浮かんでいた疑惑を確実なものへと昇華させてしまう。

「貴様、さては一度に一回しか手下を出せないな？」

「っ!」

「やはりな、おかしいと思った訳じゃ、ワシの一撃を防いだりとトンでも技を披露させてはいるが、それは全て条件付きというカラクリ、そしてそれは貴様だけのルールによって発動されるという代物」

「……………」

「そしてその案山子にも同じ事が言えよう、さあ、化けの皮を引き剥がしてくれる!」

大きく振りかぶった閣下にコナミは大技が来ると悟り身を構える。

そして。

「獅子王、斬空烈波あああっ!!!」

横薙ぎに放たれる翡翠の斬撃がコナミの場のモンスターを一瞬にして消し飛ばしてしまう。

「っ、くうう……………」

体が吹き飛ばされる衝撃に何とか踏ん張るコナミ。

ふとデュエルディスクへ視線を落とすと、そこには4000LPという数字が表示されていた。

（今は……直接攻撃ではなかったという訳か）

変わっていない数値に安堵するコナミ、しかし彼女の追撃は終わらない。

「そらあああっ！！」

「ち、罷発動！ くず鉄のかかし！」

再び振り下ろされる刃をくず鉄のかかしで防ぐ。

「ふん、やはり防ぐか」

そう言うとレオン閣下は先程と違い、アッサリと引き下がる。

「さて、一度に続き二度も防いだ訳だが……さて、次はどうする？」

「……………」

「そうさのう、今度は連続で攻撃してみるかの」

「っ！！」

「クク、青ざめたな、貴様は中々顔に出にくいがその分意外と分かりやすい」

「俺の、ターン！」

デッキからカードを引き、次は何をするのかと期待するレオンミシエリ。

しかしコナミが取った選択は……

「……ターンエンド」

場にモンスターを出す訳でも、カードを伏せる訳でもなく、ただ自分のターンを終了させた。

それを目にしたレオンはガツクリと落胆し。

「なんじゃ、もう小細工は終いか。なら……」

「っ!」

「疾く、去ねい!」

疾風の如く駆け抜け、コナミに向け刃を振り下ろす。

「畏発動、くず鉄のかかし!」

同時にコナミは伏せていたカード、くず鉄のかかしを発動させ一撃目を辛くも伏せる。

「ふ、一撃目はやはり防ぐか……ならば!」

すぐに身を引かせると、かかしはカードに吸い込まれながら姿を消し。

そしてそれを見計らって。

「もう一撃は、どつじゃっ!」

「っ!」

回転を加え、勢いを付けた一撃がコナミを襲う。

「ぐっ、がはっ！」

マトモにレオン閣下の一撃はそのまま吹き飛び、困んでいた壁に叩き付けられてしまう。

重く、それでいて鋭い一撃。

避ける間もなく直撃を受けたコナミは、その口から血の塊を吐き出す。

するとピピピとデュエルディスクから音が鳴り響き、何かと思い見ると。

4000と記された数値が一気に1000にまで減らされていた。

(つまり、彼女の攻撃力は……ざっと3000と言う事か)

皮肉にも、コナミが一番知りたかった情報をその身で知ることになった。

震える体に力を込め、何とか立ち上がると。

「ほう、あの一撃を受けてまだ立ち上がるか、中々見上げた根性よ」

既に目の前には戦斧を振り上げるレオンミシエリがいた。

「だが、これで終わりじゃ」

振り下ろされる刃、コナミがその手にあるカードを発動させたその時。

「ぬ、貴様！」

「……なに？」

白いマントを羽織った少年が、手にしている棒で以てレオン閣下の一撃を防いでいた。

「貴様は、ビスコッティのへっぴょ勇者！」

「この人はやらせません！」

「ええい！ 邪魔をしおつて！」

一騎討ちかと思われていた戦いに割って入る金髪の少年。

突然の乱入にレオン閣下は舌打ちを打ちながら引き下がる。

「貴様あ！ 閣下の一騎討ちに手を出すとはあ、何のつもりだあつ！？」

今まで黙っていたゴドウィンもこれには憤慨する。

だが彼の前に、親衛隊長のエクレールが立ち塞がる。

「お前の相手は、この私だ！」

「ぬう、貴様あ！」

交わす刃と鉄球、後ろでは激しい戦いを繰り広げる戦二人。

それを尻目にレオンはコナミとシンクに戦斧を突きつける。

「ふん、まあいい。一騎討ちの邪魔だてには貴様の初参戦という事

で多目にみてやる。それで？ 二人がかりでワシと戦うつもりか？」

「それは……」

正直、シンクは自信がなかった。

目の前で見せられたレオン閣下の動きと攻撃、それはまさに百獣の王に相応しく、荒々しくも凄まじいものだった。

瞬く間に距離を詰める俊敏さ、そして一撃一撃が重く鋭い。

マトモにやりあっては勝ち目がない、もしここにエクレールがいれば話しは変わってくるだろうが……。

しかしそれでも引き下がらないの勇者の、男としての意地か。

棒を握り締めて相対するシンクにレオン閣下はフンと鼻で笑う。

「いいだろう、ならばその道化師諸とも黒焦げにしてやるっ！」

そう言うとレオンは自身の体に再び気力を纏わせる。

そこに込められた力から、シンクはあの光景を思い出す。

“獅子王炎陣大爆破”

周囲を瞬く間に火の海に変え、大規模な爆発を引き起こすレオン閣下の殲滅技。

防ぐ手立てがないシンク、すると頭に暖かい感触が伝わってきた。

何かと思い顔を上げると。

「……………あ、貴方は」

そこには赤い帽子を被った青年、コナミが笑みを浮かべてシンクの隣にたっていた。

一体何だろうと思う矢先、コナミはシンクの前に立つ。

それはさっきと同じ、庇うように……………。

「あ、あの！ 危ないですよ！」

「……………大丈夫」

「え？」

「俺は、負けない」

シンクの制止を振り切り、コナミは最後の賭けに出る。

「俺のターン！」

「ふん、今さら貴様に何が……………」

ポロポロになったコナミにレオンは鼻で笑う。

しかし。

「俺は手札より魔法カード、調律を発動させる！」

「なに？」

「このカードはデッキからシンクロンと名のついたカードを一枚を手札に加え、その後デッキをシャッフルさせてデッキの上から力

ードを一枚墓地に送る」

「何を……するつもりじゃ？」

「俺はデッキからジャンク・シンクロンを手札に加える！」

突然勢いに乗るコナミに戸惑うレオンとシンク。

怒涛に始まるコナミのターンはまだ続く。

「そして調律の効果により、デッキの上からカードを一枚墓地へ送る」

シャカシャカと音を立ててシャッフルされるコナミのデッキ。

そしてデッキの一番上から墓地に送られるカードは……。

「俺はボルト・ヘッジホッグを墓地に送る」

背中にネジの生えたネズミが墓地と呼ばれる場所に送られる。

「そして俺はジャンク・シンクロンを通常召喚！」

『ハアッ！』

コナミの前に現れたのは黄色の帽子を被りマフラーを付けた戦士。

今までとは違い、防御の体勢ではない。

何かしらの狙いがあるのだろうか？

「だが、これで貴様の召喚は終わり、次のワシの番で貴様は終わるだ！」

獅子王炎陣大爆破の発動まであと僅か、巻き込むゴドウィンには悪いがこれでコナミ、勇者、そして親衛隊長の三人を一度に葬れる。

獅子の王は自らの勝利を確信した。

……しかし。

「それはどうかな？」

自分の勝利は揺るがない、しかし目の前の男は不敵に笑っていた。

まるでこの状況を楽しむかの様に。

「ジャンク・ンクロンの効果発動！ このカードが召喚に成功した時、墓地からレベル2のモンスターを一体特殊召喚出来る！」

「特殊召喚じゃと!?!」

「蘇れ、スピード・ウォリアー！」

『フンッ!』

葬った筈の戦士がジャンク・シンクロンの効果によって再びコナミの前に現れる。

「更に、墓地からモンスターが召喚された事により、手札のドッペル・ウォリアーの効果発動！」

「っ!?!」

「自分の墓地に眠るモンスターが特殊召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚する事が出来る！」

「特殊召喚とは、何度も出来るものなのか……」

「そして伏せ（リバーズ）カードオープン、リビングデッドの呼び

声

「そのカードは!?!」

それはコナミが最初に伏せていたカードの片割れ、くず鉄のかかしという脅威に対抗する事ばかり考えてい為、完全に失念していた。

「俺はリビングデッドの呼び声の効果により、ソニック・ウォリアーを特殊召喚!」

「それも、墓地からの蘇生カードか、小癪な!」

「更に、俺の場にはチューナーモンスターが一体存在する為、ボルト・ヘッジホッグを特殊召喚出来る!」

調律のカードの効果により、墓地に送られたネジのネズミがその効果によりコナミの前に召喚される。

目の前に今いるのは五体のモンスター、たった一度にここまで揃えられるコナミの手腕にシンクは良く分からないが兎に角凄いと思った。

「有象無象がゾロゾロと、いい加減纏めて消してくれ!」

そして一際燃え上がるレオン閣下の闘気、膨れ上がった気力が大地を振るわせ、周囲の瓦礫に輝を入れていく。

「勇者、帽子男! 早く逃げろ!」

遠くから聞こえてくるエクレールの声、しかしシンクは目の前の男の背中から視線を外す事が出来なかった。

「さあ、終わりだ！」

遂にレオンミシエリがその一撃を放とうとした。

瞬間。

「ジャンク・シンクロンでソニック・ウォリアーにチューニング！」
「チューニング……だと？」

黄色の帽子を被ったジャンク・シンクロン、そして緑色の鎧に身を包んだ戦士、ソニック・ウォリアーがコナミの叫びと共に宙を舞う。躰でジャンク・シンクロンは光の輪となり、ソニック・ウォリアーの全身を包み込む。

「集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！」

一筋の光となり、コナミの前に現れたのは……。

「シンクロン召喚、出でよ、ジャンク・ウォリアー！！」

マフラーを靡かせた青紫の機械仕掛けの戦士、ジャンク・ウォリアーがコナミの前にその姿を現した。

「黄色帽子と緑色の奴が……合体しただと？」

もうレオン閣下は訳が分からなかった。

次々と現れるコナミの手下、そして極め付きは雑魚かと思っていた

その手下が合体し全く別の手下が現れたのだ。

現存するどの戦にもこんな戦い方をする人間は、このフロニヤルドに於いて一人もいない。

「合体じゃない、シンクロ召喚だ」

「シンクロ……召喚？」

「喩え有象無象だろうが、集まれば一筋の光となり、どんな敵に打ち勝てる力になる。それを教えてやる」

「はっ！ 強い手下が増えて饒舌となったな、だが、その程度で怯むワシではないわ！」

そう、自分はガレット獅子団の王、レオンミシエリ「ガレット」デロワ。

代表者たる自分が退くことなどあつてはならない。

獅子王炎陣大爆破の術を解き、代わりにその時集めた気力の全てを戦斧に注ぎ込む。

「さあ、来るがいい！ 貴様の手下ごと今度こそ叩き潰してやるわ！」

「……だから、手下じゃなく仲間だ」

迎え撃とうと構えるレオン、対するコナミは……。

「ソニック・ウォリアーの効果発動！ このカードが墓地に送られた時、自分の場にいるレベル2以下のモンスターの攻撃力を500ポイントアップさせる！」

「く、だが、その程度では……」

「そして、ジャンク・ウォリアーの効果発動！ このカードは場にいるレベル2以下のモンスターの合計分の攻撃力を上乗せする！」

「なんじゃと!?!」

「パワーオブフェロウズ！」

コナミの場にいるモンスターは三体。

ドッペル・ウォリアー、スピード・ウォリアー、ボルト・ヘッジホッグ、そしていずれもソニック・ウォリアーの効果の対象となり、その全てがジャンク・ウォリアーの力になる。

攻撃力が上がった三体の力が、ジャンク・ウォリアーへ注ぎ込まれる。

その結果、ジャンク・ウォリアーの攻撃力は……。

「さあ、行け！ ジャンク・ウォリアー！」

『っ!!--』

6300という大台に突入する。

「スクラップ・フィスト!!」

コナミの宣言と共にジャンク・ウォリアーのスラスタに火が灯り、レオン閣下に向けてその巨大な右拳を振り下ろす。

対するレオン閣下も負けじと全身に力を込め、渾身の一撃を振り抜く。

「おおおおっ!!--」

『っ!!』

ぶつかり合う力と力、しかし拮抗していたのはほんの一瞬。

「っ!？」

『ハアアアツ!!』

スラスターの出力を上げ、勢いと威力を増加させた一撃は戦斧を砕き、レオン閣下の胸元に直撃する。

「が……は」

ジャンク・ウオリアーの一撃により壁と激突、その様は先程のコナミを逆転したものとなる。

鎧は碎けて服は破かれ、その素肌を露にしながら地面へと倒れる閣下。

その様子を眺めながら、コナミは一言。

「ターン、エンド。そして……俺の勝ちだ」

自分のターンを終了させ、同時に勝利を告げた。

王VS帽子男(後書き)

なんだか長々と、そしてグダグダになってしまいました。

申し訳ありません。

そして次回から漸く物語は進むのですが……あれ？ コナミ君はモンスターを扱う決闘者。

そしてフロニヤルドは魔物は禁忌の存在。

……コナミ君ピンチ？

つまり、ここはロンドン帝国なんですね？ ロンドン（前書き）

相変わらずのグダグダですが、良ければどうぞ

つまり、ここはワンニャン帝国なんですね？ b y r o n a m i

啞然、愕然。

この戦場にいる誰もが言葉を失い、そして誰もがその光景に目が離せなかった。

確信した筈の勝利は突然現れた乱入者によって阻まれ、一騎討ちを挑まれ、そして……。

『は、敗北っ！！ レオンミシエリ閣下、赤い帽子の男が出した奇妙な姿をした戦士の一撃に敗れましたあああっ！！』

戦場のガレット側の兵士達の現在の気持ちを、実況のフランボワーズが代弁した。

『え？ これってビスコッティの勝利なのでしょうか？ とうかがあの赤い帽子の男は一体……この場合如何致しましょうバナード將軍？』

どうにも理解しがたい状況にフランボワーズは隣にいる特別ゲストにして解説者、バナード・サブラージュ將軍に意見を求める。

『そうですね、彼がビスコッティ側の人間であるならそれ程問題ではないのですが……』

大陸協定に基づいた戦場は、死人や重傷者を出さない限りそれ程目

立った問題は起きない。

奇襲だつてするし夜襲だつてやる、基本的にはやりたい放題なのだ。だがしかし、今回の戦場は乱入という問題点があった。

事前に登録された正式な参加者ではない以上、恐らくこれは協定に反している事項なのだろう。

しかし外見から見る限り、恐らく彼はビスコッティ側と同じ異世界から現れた者。

このフロニヤルドの大陸協定が通用するのは怪しい、となればペナルティを受けるのはビスコッティ、ガレットの両国になる。

（彼が異世界の人間である以上、レオ閣下の暗殺を目論む者ではないでしょう。協定からのペナルティも事情を話せば幾分か軽くなるでしょうし）

しかし、とバナードの温厚な瞳が鋭くなる。

（彼が使っていた術、そして言葉にしていたモンスター……信じたくは無いでしょうが彼が操るのはもしかして……）

その目は獐猛な肉食獣のソレ、自身が考え付いた可能性にバナードは隣の実況に気付かれないよう赤い帽子の男、コナミに視線を向ける。

『あ、今ビスコッティ側から情報が入りました。えーと、“現在彼との事情聴衆とレオンミシエリ閣下の救護を行う為、一時戦場の中

断を願う。”とありますが」

『それは此方としてもお願いしたい所です』

『あ、追記がありました。ガレット獅子団のバナード將軍には事情聴衆の際に立ち合って欲しいと、ロラン＝マルティノツジ騎士団長から連絡がありましたか？』

『分かりました。戦の中断を許可してから私も向かいます。ビオレ、ここは任せました』

『はい、レオ様をどうか……』

心配な面持ちの女性、ビオレ＝アマレットにバナードは了解と応え実況部屋を後にした。

「…………ふう」

吹き飛び、気絶させたレオ閣下にゴドウィン駆け寄り介抱している。

自分の勝ちだと、コナミは張り詰めていた緊張感を解き召喚した全てのモンスターをデッキに戻していく。

初めて経験するデュエルに流石に疲弊を隠せず、小さな溜め息が溢れた。

「あ、あの！」
「ん？」

カードをデッキに納めている最中、声が掛けられ振り返ると。

「あ、あの、先程は助けってくれて、どうもありがとうございます！」
煌めく金髪で海のように青い瞳の少年、シンク「イズミ」がコナミに礼を言っ頭を下げる。

「お前は……」
「あ、僕はシンク、シンク「イズミ」と言います！」
「……コナミだ」

改めて自己紹介をするコナミ、だがさっきまでの凛々しい姿とは様子が違い、ダルそうにしているコナミにシンクは若干戸惑う。

「あの、コナミさんは僕と同じ異世界からの勇者なんですか？」
「勇者？ いや、俺は決闘者だが？」
「でゆ、デュエリスト？」
「簡単に言えば、カードで戦う者の事だ」
「カード？」

困惑し、良く分かっていないシンクにコナミが一枚のカードを差し出す。

「これがそのカードだ」
「……かかし？」

コナミがシンクに見せたカードは速攻のかかし。

墓地にこのカードを送る事で、相手からの直接攻撃を防ぐ事が出来る効果を持つカード。

レオ閣下の追撃が来た時、咄嗟に発動させようとしたカードである。

本来ならあの場面でシンクが助けに入らずとも何とかなっただが……。

「それに、こっちも助けて貰ったからな」

「へ？」

「ありがとう」

デュエルとは最後の最後まで何が起こるか分からないゲーム。

喻え速攻のかかしを使って攻撃を防いでも、何らかの要因で自分は負けたのかもしれない。

実際ギリギリの戦いだった為、コナミは素直にシンクの助けを有り難く思った。

「い、いえそんな、僕なんか……」

まさかお礼を言われるとは思わなかったのか、照れ臭そうにはにかむシンク。

するとそこへ……。

「勇者殿、大事ないか？」

「あ、ロラン騎士団長さん」

槍を持った背の高い温厚そうな男性、エクレールと同じ垂れ耳な所、彼女とは兄妹なのだろう。

「ロランと呼ばれた白の甲冑を身に纏う男性は“槍を持ったまま”コナミに近付いてくる。」

「さて、早速で悪いが……君は一体何者だ？ どうしてあんな事を……」

「コナミだ」

「え？ ああ、そうか……ではコナミ殿、どうして君は戦場にいたんだい？ 君も何処かの国の勇者なのか？」

「俺は決闘者、勇者じゃない」

「でゆ、でゆえ？」

どうも話が今一噛み合わない。

此方の質問に応えてはいるが、その度に話が折れ、何だか疲労を感じる。

だがここで此方が折れる訳にはいかない。

咳払いをし、調子を整えると、ロランはコナミに単刀直入に問い詰める。

「なら、単刀直入に聞こう。君が使用した術、その最中にモンスターという単語があったが……それは“魔物”という意味か？」

瞬間、空気が変わった。

いつの間にか自分の周りには大勢の兵士が囲んでいる。

ビスコッティ、ガレット、両国の兵士がコナミに不信な動きがあれ
ばすぐに取り押さえようと身構えているのだ。

しかし魔物という者がそんなに恐ろしいのか、兵士達のコナミを見
る目が恐怖に歪んでいる。

コナミが辺りを見渡す度にビクリと肩を震わせ、顔を青ざめていく。

そして目の前のロランも額に汗を滲ませ、コナミの出方を注意深く
見ている。

張り詰めた緊張感、今までとは違った種類の緊迫感にシンクは思わ
ずコナミを庇うように前に出た。

「ちょ、ちょっと待って下さい!」

「勇者殿?」

「その、僕は異世界から召喚されてこの世界の事は何一つ知らない
余所者だけど……この人は、コナミさんは僕とエクレールを助けて
くれました!」

「それは……その」

「僕もコナミさんの事は全然、何も知らないけど、多分悪い人では
ないと思うんです!」

「しかし……勇者殿」

必死の思いでコナミを弁護するシンク。

確かに、コナミは怪しいしモンスターを操るし、色々おかしな人間
だが、それでも二人を助けたという事実は覆らない。

妹を助けて貰っている以上、ロランもこれ以上問い詰める事は出来なかった。

しかし、それでは怯えている兵士達は納得しないだろう。

一体どうするか、この煮詰まった状況に頭を悩ませていると。

「コナミ……さん？」

シンクの頭に手を置いたコナミが一步前に出る。

たったそれだけの行動に周囲の兵士がざわりと騒ぎ立つ。

兵士の後ろでレオ閣下の介抱をしているゴドウィンも、コナミの言動を注意深く見つめていた。

「俺は……確かにモンスターを操る。けれどそれがお前達の言う魔物かどうかは分からない」

「……………」

「俺は何でいるのかも分からない、ただ気が付いたらここにいた」

「それを信用しろ、と？」

「別に信用される必要はない、俺はただ本当の事を言っただけだ」

「投降するのなら悪い様にはしない、ただそのカードは預からせて貰うが……」

「それは無理だ。これは俺の仲間だ。仲間を売るような真似はしない」

ズキリと、ロランの胸中にある良心が痛む。

これは勘だが、恐らくこの青年は自分達が思っている悪人ではない。帽子越しから覗く澄んだ瞳を見て、ロランは騎士としての勘が正しいと告げている。

だが、今の自分は騎士団長。

騎士の代表格の自分がそんな曖昧なモノで決定する訳にはいかない。何より、ここにいる兵士達が納得しないだろう。

良心が激しく痛むが、ロランは最悪の場合力づくという手段を選ぶしかなくなる。

願わくは大人しく捕まって欲しい、そう思った時。

「だから、俺はここで逃げようと思う」

「へ？」

いつの間にかコナミは黄金に輝くデュエルディスクを掲げ、ポチリとあるボタンを押していた。

すると、兵士達の後ろから爆音が轟き、何だと振り向くと。

「う、うわあああつ!?!」

「な、なんだこいつ!?!」

深い青色のオートバイが勝手に動きだし、不気味に思った兵士達が避けていく。

モーゼの十戒の如く左右に分かれた兵士の壁、それを認識したのがオートバイ改めDホイールは一気に速度を上げる。

突っ込んでくるDホイールに思わず避けるロランとシンク、そしてコナミは突き進むDホイールに乗り込み。

「じゃ、そういう訳で」

それだけを告げると、コナミはDホイールと共に戦場を駆け抜け、風の如く去って行った。

猛スピードで駆け抜け、瞬く間に戦場から姿を消したコナミ。

全く状況が呑み込めないまま、兵士達はそれぞれの陣地へ帰っていく。

「いやいや、まさかあんな細工が施されていたとは……」
「済まないバナード將軍、彼を逃がしてしまった」

帰還していく兵士達を見送りながら戦場に未だ佇んでいるのは、両国の騎士団長であるロランとバナード。

バナードが来る前に逃がしてしまった事を言い訳もせず謝罪する
ロラン。

「いや、君だけの責任ではないよ。彼の隠し手に気付かなかつた私
にも非がある」

「しかし……」

「それよりもどうだった？ 君から見て彼は……コナミという人物
は？」

コナミ、見たことも聞いたこともない術を用い多くの“魔”を操る
者。

ここまで聞けば、コナミはこのフロニヤルドに於いて非常に危険な
存在と思われるが。

「そうだな、私から見れば彼は多分無闇矢鱈に力を奮う人間ではな
いと思う」

「その根拠は？」

「……誠にお恥ずかしい事だが」

「勘……ですか？」

その問いにロランは申し訳なく頷く。

それを見るとバナードはやれやれと肩を竦める。

「良いでしょう、一先ずは貴方を信じましょう」

「済まない」

「いえ、では私はレオ様の所に向かいますので」

「バナード將軍！」

踵を返し、立ち去ろうとしていたバナードにロランは呼び止める。

何かと思い……いや、本当は何が聞きたいのかは分かっている。

呼び止められたバナードは振り向かず、ただ立ち止まる。

「……何故レオ閣下はあんな頻繁に我が国に攻めいるのだ？ まさか……本当に侵略を？」

「それはありません。確かにここ数ヶ月、ビスコッティへの侵攻は異常とも呼べる速さですが侵略するつもりはないと断言します」

「では、一体何故？」

「……すみません、私にもそれは」

「……そうか、呼び止めて済まなかった」

「いえ、それでは……」

一通りの言葉を交えるとバナードは、今度こそレオ閣下の下へ向かう為はその場を後にした。

残されたロランは去って行くバナードを見送り。

「コナミ殿……か」

風の如く現れ、そして去って行った青年。

また、会える気がする。

確信ではなく、勘。

「私もまだまだ精進が足りんな」

その眩きだけを残し、ロランもまた自身の陣地へと戻っていった。

「うー、腹減ったあ……」

宛もなく、ただ道なりにDホイールを走らせるコナミの眩きは風と共に消えていく。

あれから数分経ったが追っ手が来る様子もなく、緊張を解いたコナミは気ままにDホイールを走らせていた。

肌を刺激する風も心地よく、空気も澄んでおり気持ちがいい。

しかし、そんな綺麗な環境でも空腹だけは満たしてはくれなかった。

ググウー、と、鳴り響くお腹を擦る。

そう言えば遊星と別れを告げてから何も食べていなかった。

ネオドミノシティから出てても何処かの町や村で食べればいいと、無計画な自分を今更ながら悔やんだ。

引き払った部屋に残してきた無限にお菓子が増殖する冷蔵庫が恋しい。

そんな事を考えている内に、また空腹の音が鳴る。

何処かに食べ物にありつける場所はないか。

辺りを見渡し人が居そうな場所を探していると。

「！」

道なりの先に中世を思わせる砦が見えてきた。

それを確認したコナミはDホイールを加速させ、砦に向かっていった。

「それで、ジェノワーズの連中はフィリアンノ城に潜入できたのか？」

「はっ！ 報告によればジェノワーズの三人、共に城への侵入が完了、現在ミルヒオーレ姫の搜索中との事！」

「となるとどうやらゴドウィンの方が先に到着しそうだな。……分かった。下がっていいぞ」

「ハハッ！」

ミンヨウ砦、フィリアンノ城から少し離れた砦。

そこに設けられた玉座の間にて一人の少年が玉座に座り、跪いた兵士から情報を聞き出すと納得しながら下がらせた。

顎に手を添え、短い銀髪を少年はガシガシと乱暴に搔く。

「うーん、しつかしいまいち信じらんねえな。“魔物を操る男”……ゴドウィンは信頼に足る男だがこればっかしはどうも」
「ですがガウ様、その戦場には多くの兵士がその一部始終を目撃しています」

「別に兵士達が嘘を吐いているとは思わねえよ、ただ……なあ？お前はと思うよルージュ」

ガウと呼ばれる少年は側に控えていたメイド、ルージュに話を振る。

「そうですね、うーん……その男の人は実は魔物の精霊さんで、だから魔物の力を使って……」

「それはねーよ」

「……ですよね」

ジト目で否定するガウ様にルージュは泣きそうになった。

「ま、今はそれよりも勇者だ。例の男に邪魔されたとは言えソイツも強いんだろ？」

「はい、ビスコッティの勇者は軽装型、ガウル様と同じ戦闘型ですね」

「へへ、早く来ねえかな」
「……はあ」

見た目と同じ、年相応に目を輝かせる少年、ガウル。

自分の主がバトルジャンキー戦闘中毒者になり掛けている事に呆れながらも、メイドのルージュはたしなめようとするが……。

「ルージュ」

「はい？」

「悪いな、こんな事に付き合わせちまって、だけど勘弁してくれ、ミルヒには少し話したい事があったからな。こんな手段しか思い付かなかったのは俺の未熟なせいだ。……すまん」

先程とは違い真剣な面持ちになるガウル、その表情には子供らしい無邪気なモノではなく、全てを背負って立つ王の気質が含まれていた。

「いいえ、私はガウ様のメイドですから」

だからルージュはそれ以上何も語らず、ただ告げた。

貴方に付いていくと。

その意味を込めた一礼にガウルは嬉しく思い。

「あんがとな」

無骨に一言、そう言った。

そして同時に。

「ガウル様！」

先程下がらせた筈の兵士が何やら慌てた様子で戻ってきた。

「どうした？ 何かあったのか？」

「ハッ！ 砦の前で彷徨っていた怪しい男がいたので、捉えて来ました」

「怪しい男？ 分かった、ここに通せ」

「ハッ！」

ガウルの命令に兵士は一旦下がり、二人の同僚の兵士を連れて玉座へと入ってきた。

二人の兵士に抱えられている男、その男を見るとルージュとガウルは目を丸くした。

何故ならその男は報告にあつた赤い帽子を被つた男。

魔物を操る者として噂される要注意人物。

その男が今日の前にいる。

ガウルは一瞬戦闘体勢に入ろうとするが。

「……すみませんがご飯……下さい」

「……は？」

目を回し、力なく項垂れるコナミにガウルは面食らうのだった。

つまり、ここはワルンニャン帝国なんですね？ b y r o n a m i (後書き)

コナミ君をビスコッティ側にするべきか、ガレット側にするべきか
……悩みます。

第一印象は挨拶から（前書き）

今回は短めです

第一印象は挨拶から

“魔物”

それはこのフロニヤルドに於いて、災いをもたらす禁忌の存在。

過去には魔物によって村を、街を、国を破壊し、数多の命を奪い。

その力はその大地に住まう土地神すら殺すと言われており、幾百年と経った今でも大変危険な存在として語り継がれてきている。

今となつては魔物は大地の奥深くに封印されているとされ、お伽噺話同然に扱われているが。

とある青年の出現によって、そのお伽噺は真実味を増していった。

その青年は摩訶不思議な力を用い、様々な“魔”を操る者と……。

信じられない、と誰もが思うだろう。

唯の人が魔を操るなど、それこそお伽噺話だと鼻で笑うだろう。

しかし、当時のビスコッティやガレットの兵士達は口を揃えて言った。

あれは、人ではないと……。

「ガツガツムシャムシャ……ングング、ハグ」

「……………」

目の前の光景に赤い帽子の男、コナミを監視している兵達、そして彼等の主たるガウルは啞然としていた。

門番の兵士達により捕縛された赤い帽子が特徴の青年、コナミ。

先のフィリアンノ城前で開催されていた戦で、奇妙な術を持って魔を駆使すると言われている男。

既にその話はこのミンヨウ砦にまで聞こえている。

その男が捕まった。

ガウルは男から直々に話を聞きたいと年相応の興味心に従い、精鋭の兵士を従えてコナミに食事を与えた。

警戒を弛めず、コナミの一挙一動を注意深く観察しているガウル。

何かあれば自分が潰せばいい。

自分はその（・・・）レオンミシエリの弟、自分で蒔いた災いの種は自分で刈る。

ガウルはテーブル下に拳を握り締め、口端を吊り上げる。

しかし……。

「なんか、警戒していた俺達って……バカみたいだな」

「あ、アハハ……」

余程空腹だったのか、食べる事に集中して此方の殺気に気付いていない様子のないコナミにガウルはただ呆れ、隣に控えていたルージューは困り顔で苦笑い。

「ンゲング……すみません、これお代わり」

「あ、はい、ただいまお持ち致します！」

「まだ食うのかよ!？」

既に三人前を平らげ、それでも凶々しくお代わりを頼むコナミ、そして従者の性か、その要求に応えるルージューに流石のガウルも突っ込んだ。

「つかテメエ、一体何者だ？ 聞いた話だと魔物を操るらしいが？」

これ以上は埒が開かない、何よりこんなまどろっこしいの自分らしくもない。

ガウルは回りくどい会話でのやり取りは丸投げし、単刀直入で問い

詰めた。

「俺はコナミ、フリーの決闘者だ。……まあ、魔物というのはあなたが間違っているな」

前半のは兎も角、後半からコナミの口から語られる言葉に周囲の兵士達は一斉に身構える。

それをガウルは片手を上げ事で制し、彼等の変わりに再び問い詰める。

しかも、今度は殺気付きで。

「……それで、そのコナミが一体何故このフロニヤルドに？」

その低い声色に兵士達は一瞬ビクリと肩を震わせる。

あれは本気の目だ。

獅子の血を受け継ぎ、鋭い眼光でコナミを射抜く。

もしコナミが嘘や自分達の脅威になるつもりなら、即潰しに掛かる。

誰もがそう思い、この場に居る全員が固唾を呑んでコナミの返答に注目している。

「モグモグ……知らない、気が付いたらここにいた」

なんとまあ呑気な返事だろうか。

ガウルの殺気混じりの問いに、コナミは動じる処か骨付き肉にかぶり付きながらの返答に、誰もがアングリと口を開けて呆然としていた。

が、それはまさしくコナミの嘘偽りの無い言葉。

というか、嘘を付く必要がない。

そんなコナミの応えにガウルはガツクリと項垂れ……。

「……なんか、真面目に対応した俺がアホみてえだ。ルージユ、俺にも飯をくれ」

「はい、畏まりました」

溜め息と共にガウルはこれ以上の問答を諦め、ルージユに飯の用意をさせる。

「が、ガウル様、本当に良いのですか？ こやつを放っておいて」

「ああ、コイツの姿を見て、言葉を聞いて確信した。コイツは下手な野望とかそんなものとは無縁の奴だ」

「し、しかし……」

「それに、お前等の想像通りの人間だったら、コイツは今頃その力でこの砦を破壊し尽くしていただろうな」

サラリと恐ろしい事を口にするガウルに兵士一同震え上がる。

だが、確かに言われてみればそうだ。

ガウルの言う通り、この赤い帽子の男はそんな力を持っていても一

向に使用しようとする気配はない。

今のところ、自分達と敵対する意思はないようだ。

というか、未だに食べる事に夢中で隙だらけのコナミに兵士の皆も自分達が警戒していたのが馬鹿馬鹿しく思えてきた。

すっかり和やかになってきた空気に、料理を運んできたルージュや他のメイドの面々は、笑みを浮かべながらテーブルに数々の料理を運んでいく。

食べ、飲み、ちょっとした宴会になり、誰もが騒いでいるなか、ガウルは一人静かにコナミを見つめていた。

(コナミか……へへ、ビスコッティに現れたという勇者に続いて異世界からの人間が二人も現れるとはな……決めたぜ！俺はコイツを、ガレットに連れていく！)

口元からキラリと光る牙を覗かせ、ガウルは不敵な笑みを浮かべながら固く、そう決めたのだった。

「ガウル様あ、ただいま戻り……ぬう！？ 貴様あ！！」

「ゴドウィン、落ち着け」

「それではコナミ様、今宵は此方の部屋でお休み下さい」
「……ハイカラだな」

その後、戻ってきたゴドウィンを説得したガウルはコナミに適当な部屋を案内するようルージュに命じ、砦内を歩き回っていた。

中庭には百人を越す兵士が詰め掛け、すぐにも戦が始まりそうな物々しい空気に包まれている。

そして漸く辿り着いた部屋に入ると、シャンデリアや高級そうな家具や寝具が置かれた一流ホテルにも及ぶ豪華な装飾にコナミは驚きの声を漏らす。

「それでは、ここにいれば安全です。トイレはあちらにありますので、戦が終わるまで暫くお待ち下さい。何かお困りでしたらすぐそちらの鈴で及び下さいね」

「……ども」

「それでは、失礼します」

扉を閉め、部屋を後にするルージュ。

残されたコナミは辺りを見渡し、取り敢えずベッドに腰掛ける。

………凄い弾力だ。

海野幸子や大金持ちの人達は皆こんな部屋に住んでいるのだろう。

そりゃ自分の部屋が物置小屋に間違われる筈だ。

「それよりも、俺は……どうしてここに？」

ガウルが言っていたフロニヤルド……それは多分この大陸、或いはこの世界の総称を差している言葉なのだろう。

異世界。

コナミはその経験上、このような体験は幾つも経験している為、然程驚きはしない。

とある島に設立されたデュエルアカデミアに、三年程在籍した時もそうだった。

だが、一体何の為に？

剩りにも唐突過ぎる、前触れもなく予兆もなく、狙っていた様にあの空間の歪みはもはや作弄的なものを感じる。

それに、モンスターの実体化もそうだ。

デュエルモンスターズの中には危険且つ凶悪なカードが眠っている事もある。

そんなカードがこの世界で自由に操れる事が可能ならば、それはこの世界に災厄をもたらすも同義。

だから、コナミは自分を囲んでいた兵士達の対応は適切だと思った。

彼等の言う魔物とデュエルモンスターズ、どちらも普通なら危惧する怪物であり彼等からすれば、今度はその怪物をを操るヤバい奴が現れたと思うだろう。

今更ながらコナミは彼等の焦燥した態度の意味を気付く事が出来た。

「仕方ない、戦とやらが終わったら抜け出すとしようか」

その為にはDホイールを探さねばならない。

手元にあるデッキはレオとの戦いに使った物を含めて後二つ。

どれも遊星やジャックとタッグを組む時に使われているデッキ、そして一部のサイドデッキだけである。

残されたカードはDホイールに荷物と一緒に乗せている為、早いとこ見つけ出しこのまま去ろう。

善は急げ、コナミはDホイールを見つけ出す為、部屋を開けようと扉の取っ手に手を向けた。

その時。

「コナミ様、少し宜しいでしょうか？」

「っ！ あ、ああ……」

扉越しから聞こえてきたのは自分をこの部屋に案内したルージユの声、一体何をしに戻ってきたのか、まさか自分の考えが読まれたのか？

コナミは内心焦り始める。

「あの、申し訳ありません。大変失礼だと思えますが相部屋をしても宜しいでしょうか？ 何分他の部屋が埋まっておりまして、空いている部屋はここしか……」

「あ、うん。大丈夫だ、問題ない」

「ありがとうございます。では、ミルヒ様」

「は、はい……」

急いで適当な椅子に座り、何もなかった様に振る舞うコナミ。

扉が開かれ、部屋に入ってきたのはルージユと。

「あ、貴方は！」

ピンク色の髪、如何にも高貴な家柄のお嬢様っぽい少女。

犬耳と尻尾をピンと立てて驚いている彼女にコナミは取り敢えず。

「……オッス、オラコナミ」

場を和ませる為、彼なりのギャグを混ぜて挨拶した。

第一印象は挨拶から（後書き）

最初は無口設定だったのに……早速設定変えてしまった。

決闘者の夜（前書き）

今回も短いです。

決闘者の夜

勇者様がフロニヤルドに召喚されて初めての戦興業。

勇者様や皆の活躍のお陰で逆転の兆しが見えてきた時、あの人が見えませんでした。

セルクルではない不思議な乗り物に跨がり、聞いたことも見たこともない術を用い、レオ様を打ち倒した帽子の人。

皆はあの人を魔を操る者だと言っていますが、果たしてそうでしょうか？

遠巻きに見ていただけの私が言っても説得力は無いでしょうが、それでも思っんです。

あの方はきっと、勇者様と同じで心優しい御方なのだと。

話を聞きたかったのですが、帽子の人はあの奇妙な乗り物に跨がり、あっという間に戦場を去っていきました。

帽子の人という乱入者もあり、戦は曖昧となり、引き分けという形に成りつつありました。

けれど私は頑張ってくれた皆の為に、色々未熟の身ではありますが歌を披露する事にしました。

皆の頑張りに少しでも応えたくて、だから私は一生懸命に歌う事を決めたのです。

「ただ、ここでまた新たな問題が……勇者として喚ばれたシンク様が一度召喚されればもう帰れないという事を知り、大変落ち込まれているという事。」

「私のせいだ。」

「私が勇者様をビスコッティに召喚したが為に、勇者様はご家族の所に帰れず、一人孤独へと追いやってしまった。」

「何とか謝罪しようとしたのですが、戦興業の後始末に歌のリハーサル、とても勇者様にお会い出来る時間がありませんでした。」

「……やはり、私は領主としてダメダメで勇者様にもご迷惑を掛けてばかり。」

「やはり、レオ様みたいな立派な領主には無理なのでしょうが……。」

「もしかしたら、レオ様も未熟な私に愛想を尽かされて……だからビスコッティに侵略を？」

「ではミルヒ様、こちらの部屋でお待ちください。」

「は、はい！」

「歌のリハーサルを終え、いよいよ本番間近に控えた時、ガウ様の親衛隊ジェノワーズに拐われて、ここミオン砦の一室へ招かれたのですが。」

そこにいたのは……。

「オッス、オラコナミ」

突如として現れた不思議な帽子の人がいたのです。

「あ、こ、こんばんは。私はミルヒオーレ〓フィリアンノ〓ビスコ
ツティと申します」

「……………」
「……………」

沈黙。

ルージュにこの部屋へと案内され、コナミと同室になってからもの、簡単な自己紹介が終ってからは互いに言葉を交わしてはいない。

居た堪れないミルヒを尻目に黙々と床でデッキ構築に勤しむコナミ。

ミルヒからすればカードを選別をしている様にも見える為、コナミの仕事を注意深く観察していた。

だが、なんて話かけていいか分からず、ただ椅子に座りコナミの様子を見つめているだけ。

すると意を決したのか、よしと握り拳を作ったミルヒは勇気を出してコナミに声を掛ける。

「あ、あの……コナミ様？」

「ん？」

「一体、何をなされているのですか？」

「デッキを作っている」

「あ、そうですか……」

会話終了。

デッキって何？　なんでこんな所にいるの？　と、聞きたい事は山程あるのにコナミが簡潔に応え、自分も話を切り上げてしまった為、ミルヒは自らを更に追いやってしまう事となる。

(うう、うう、会話が続きません)

重苦しい沈黙に耐えきれなくなったミルヒが涙を滲ませた時。

「なあ、聞いていいか？」

「は、はい!？」

今度は意外にもコナミの方から話し掛けてきた。

思わず声は裏返り、耳と尻尾をピンと伸ばしてしまう。

明らかに緊張している彼女にコナミが問い掛けたのは……。

「お前達がしていたのは……戦争か？」

「……え？」

戦争、それは人間同士が生きている上で避けては通れない道。

互いの主張、理想、スレ違いが増長し、増大し、やがてそれらは怒りや憎しみを呼び起こし、炎となって戦争という形となって爆発していく。

そしてその戦争を商売としている人間すら増えていく。

だが、コナミがフロニヤルドで目撃した戦争は彼が“今まで”見てきたモノとはまるで違っていた。

血を流す訳ではなく、だけど真剣で戦い、だけど憎しみや悲しみに囚われている様子は見えない。

これまでにない戦いの在り方をコナミは知りたくなった。

帽子越しからの視線にミルヒは一瞬息を呑んだ。

澄んだ瞳から感じる圧力、その目からは目の前の男からこれまで生きてきて得た何かを感じられた。

暫く続いた沈黙の後。

「分かりました。私の知る限りですが、お話し致します」

ミルヒはコナミの視線を真っ直ぐ受け止めながら、このフロニヤルドに付いて語り出した。

「戦興業……か」

「はい、大地に宿るフロニヤルド力の加護により、死者や怪我人はありません」

ミルヒから聞かされる戦興業。

国交手段の一つとして行われており、戦の参加者には参加費用を徴収し、活躍した分だけ戦終了後にその報酬を分配されている。

勝った国は集まった参加費用の六割を、敗戦国は四割に分けられ、国政や臣下の給料に割り当てられる。

参加費や金という言葉にやや反応するコナミだが、その使い道や市民の安全対策の事を聞かされると、どこか安堵した様子を見せる。

ミルヒの説明に安心したコナミは再びカードに視線を向け、デッキ構築に勤しんだ。

「あの、私も聞いて良いですか？」

「？」

「貴方は一体、何者なんですか？」

いつの間にか隣で正座しているミルヒにコナミは少し後退る。

興味深々といった様子で見詰めてくる彼女に、コナミは帽子を深く被り直し。

「俺は……決闘者だ」

「でゆえ……りすと？」

「こつ言ったカードで戦う者の事だ」

そう言っただけのカードは一枚のカード。

そこに描かれている絵柄は何処と無く獣玉になった兵士達に見える。

「こ、これは？」

「クリボン、俺の仲間の一人が愛用しているカードの一枚だ」

すると、コナミはそのカードをデュエルディスクにセットすると。

『クリッ？ クリーッ！』

「ひゃあっ！？」

カードに描かれていた毛むくじやらのモンスターがミルヒの目の前で現れた。

突然の事に驚き、尻餅を付いてしまうミルヒ。

『クリッ！？ クリッ、クリクラー！』

すると今度は尻餅を付いてしまった彼女にクリボンと呼ばれるモンスターが心配そうに駆け寄ってきた。

「驚かせて済まないと言っている」

「わ、分かるのですか!？」

「何となくだが、な」

心配の面持ちで見上げてくるクリボン。

そのつぶらな瞳にミルヒは保護欲が刺激され、試しに撫でてみようとする恐る恐る手を伸ばすと。

『クリ〜…………』

「…………フフ」

伸ばされた手はアツサリと受け入れられ、気持ち良さそうに目を細めるクリボンにミルヒは晴れ渡った笑顔を見せた。

「…………俺は、別にこの力でこの世界をどうしようという心算はない」

「え?」

「気が付いたら俺はこの世界にいた。戦に乱入したのは事実だがあれは咄嗟に動いただけ、どうか信じて欲しい」

「…………あ」

深々と頭を下げるコナミにミルヒは息を呑んだ。

コナミは一見、魔物を操る超危険人物に見えるだろうしそれにより誤解される人も増えていくだろう。

コナミは何となくだが魔物が、この世界に於いてどれだけ危険な存在か勘づいて来たのだろう。

頭を下げる事で自分なりに誤解を解こうとしているコナミに、ミルヒは慌てて両手を振った。

「い、いいえ此方こそ！ 責める様な言い草で本当に申し訳ありません」

次いで今度はミルヒがコナミよりも深く頭を下げる。

「いやいや此方こそ」

「いえいえ此方こそ！」

「そんな此方こそ」

「そんな、此方こそ！」

「……何やってんだ？」

床に頭を擦り付けている何とも奇妙な光景にガウルは若干引いていた。

「あ、ガウル様！」

「ああ、そんな固くすんなって、楽にしてくれ」

いつの間にか入室していたガウルにミルヒはハッと我に返り、服や頭に付いた埃を払いながら向き直る。

彼女の姿勢にとやかく言わないガウルは楽にしてくれとだけ言っただけでそのまま話を続けた。

「悪かったな、拉致なんて真似して……ただ、少し俺にも思う所があつてな」

「……はい」

一瞬だが表情が暗くなるガウル、その顔付きを見て何を思ったのかミルヒもまた表情を暗くさせる。

「この戦が終われば、安全にフィリアンノ城に返してやつから、窮屈だろうが我慢してくれ」

「はい、分かりました」

「あと、おいコナミ……だったよな？」

「うん？」

「お前にはこの戦が終わった後にも用がある。それまではここでジツとしてるよ」

それだけ言うと、ガウルは部屋を後にし、残された二人にはまた沈黙が包まれる。

すると急に外が騒がしくなり、爆発音や兵士の雄叫びが聞こえ始めてきた。

「戦が、始まったか」

そう呟くと、コナミは一組のデッキとデュエルディスクを手に立ち上がる。

「あ、あの……どちらへ？」

大人しくしておけと言われて起きながら、部屋から出ていこうとするコナミにミルヒは呼び止める。

「ここでは飯を食べさせてくれた恩がある。それを返しに行く」

「で、ですが、ここからは出るなど……」

「皆からは出ないから大丈夫」

何とも下手な屁理屈である。

しかし、それを本気で通じると思っているのか、コナミはクリボンと共に部屋から出ていった。

残されたミルヒはそんなコナミがやはり悪人とは思えず。

「コナミさん……か、また会えないかな」

今度は勇者や皆と一緒にと、微笑むのだった。

「いやあ、見事に嵌まりましたでござるな、リコの花火攻撃」

「ユツキーやダルキアン卿、隠密部隊の皆のお陰であります！」

ミオン砦に落とされた花火は瞬く間に兵士の殆どを獣玉へと変えてしまった。

栗色の髪をした犬耳少女、リコツタ「エルマールと金髪で狐耳のユキカゼ」パネトーネ。

拉致された姫様、即ちミルヒーレ姫殿下を救出する為勇者を援護する二人。

既に兵士の殆どは片付き、後は親衛隊長のエクレールと勇者シンクがミルヒを救い出すのを待つだけ。

二人は勇者やエクレールを信じ、待ちながら辺りを警戒していると。

「っ！ リコ、下がっているぞ！ ちるよ」

「ユッキー？」

耳をピクリと動かすと、振り向きながら腰に付けた短刀を握り締め、ユキカゼは暗闇の方へ睨み付けた。

一体どうしたのだろうか、リコがユキカゼの後ろに隠れながらその視線の先を見つめると。

その男は現れた。

小細工などせず、堂々と真っ正面から現れたのは黄金のデュエルデイスクを携えた赤い帽子の男。

突然戦場に現れ、あのレオンミシエリ閣下を一騎討ちで打ち倒した男。

「さあ、デュエルの時間だ」

コナミが一人の前に立ちはだかった。

決闘者の夜（後書き）

感想、お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0807z/>

コナミ君のフロニャルド冒険記

2011年12月20日02時00分発行